



ここは肉の牢。むせ返るような淫気が充満し
麻子の体は否応無しに発情させられていた。

「うう…動けない…」

「麻子、今日はこの触手から精を絞り出して空にしろ」

「そんなの無理ですよお…」

「できなきゃここから出られないぞ」

「酷いです…」

ふーっ♡
ふーっ♡

グッ

グッ

ギョッ
ニョッ



男に強いられ、麻子は腰を振り始める
「はあ……んぎいい……太いい……あああつ！」
「偉いぞ麻子、その調子だ」
「は、はいいい……んああつ」

うあ……
ああ……♡

ビクッ

ビクッ

ジュー
ホッ

ボ
ニ
チュ

無意識に自分の感じる部分へ触手をあてがう麻子。

「んんっ…あっ…ああああ…!!」

「良い腰使いだ。ここで男共を喜ばせる練習をしておけ」

「そんな…んっんあああ…あっあっあっ…」

ビグッ

あぁっ…♡
ボシゅッ
ボシゅッ

ニチュ

麻子に深く突き刺さる触手が精を吐き出す。
同時に麻子も最初の絶頂を迎えた。

「んぐうううう……！」

「まず一発目だな。あと十数回くらいで空になるだろう」

「そ、そんなにですか……？」

「それくらいはできないと練習にならないからな」

「勝手なこと……ばっかり……んはああ……」

「ほら次だよ次」

ズン
ズン
ズン

ズン
ズン
ズン

ビュ
ビュ
ブル

ぐづ……♡



再び麻子が腰を動かす。触手の淫液が蜜壺に塗り込められていく。
その度に麻子の感度は少しずつ増していく。

「はあ…はあ…ううあああ！ああっ！」

「感じ始めて来たな麻子」

「わ、私は、んああ…あなたにつ…んぐう…言われて…」

「そのまま続けろ」

「は、いい…」

ビクビクッ

ゴビュッ
ヌシユ

ヌプッ

はーっ
はーっ



歯を食いしばって必死に快楽に耐える。

「うう…早く…終わってえ…うああ…」

「触手も麻子の腰使いを喜んでるみたいだぞ」

「そんなの…うぎいい…うれ、しくないいい…!!」

ビグッ

ぐんぐん…
んんっ♡♡

ンッ

ボ
ボ
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ

チュ

触手が二度目の痙攣を起こす。大量の淫液が注がれる。
あまりの精の勢いで腰が浮きそうになる。

「あああああああ——！！！」

「その調子なら大丈夫だな、暫くしたらまた見に来るよ」

「そんな……こんな場所に独りだなんて……うう……」

「じゃあね」

触手の精が空になるまで、麻子はここから出られない。

ゴダック

ンッ

ビュッ
ビュッ
ブルッ

ああっ♡
ああっ♡



16時間後ー

麻子は幾度も絶頂を迎え、虫の息になっていた。

「はー……はー……う、ああ……あ……」

「おー、ちゃんと触手を満足させられたようだな」

「うう……ぐすつ……ぐすつ……」

「これなら男共も満足させられそうだな」

「……」
牢の中にも外にも希望など無い。

ビクッ

ビクッ

ビュルッ
ビュッ

